

# 上田秋成の和歌と俳諧

一紀行文を中心に一

金京姫\*

---

## 目次

---

- 1 はじめに
  - 2 和歌と俳諧―『秋山記』『去年の枝折』
  - 3 秋成の表現意識
  - 4 おわりに
- 

## 1 はじめに

上田秋成は読本作家として知られているが、一方では、俳人・国学者・歌人・茶人として多方面に活躍をした江戸中期の文人である。彼の文芸活動の出発である俳諧の活動については、すでに三十歳の時、洒落本『列仙伝』（宝暦十三年、一七六三）に、「ひとり武者」<sup>1)</sup>と評価されており、几董の東臯宛書簡に「撰陽に無腸(秋成)といへる一大家あり。誌をよくし、俳諧は宗因・鬼貫・来山をとる無双の才子成。」とあることから俳諧作者として認められていたことが言える。和歌の活動については、一生を通じて和歌を作り続けており、彼の死にあたり『西福寺過去帳』に「大坂出生人歌道の達人、三余齋無腸居士」<sup>2)</sup>と記されたほどであったから、当時において秋成の和歌は優れたものと

---

\* 韓国外語大学 講師、日本近世文学

1) 中村幸彦氏は『列仙伝』に「ひとり武者は鬼上又きんど、ぞゑん、きやうごなど皆はいかいのしれ者なるが」とあることを指摘し、それについて「ぞゑんを、漁焉にあてると、彼は俳系のない独武者と世間から認められていたこととなる」述べている。「上田秋成雑記」『中村幸彦著述集』第六巻 中央公論社、1982、218頁。

2) 高田衛(1964)『上田秋成年譜考説』明善堂書店、347頁。

言うことができよう。

そんな中、秋成は安永八年（一七七九）、湯治のため妻同伴で城崎温泉への旅に赴き、帰宅後、和歌紀行『秋山記』<sup>3)</sup>（同八年成）を書いた。さらに翌九年に、前年の旅を思い起こして書いたのが俳諧紀行『去年の枝折』である。

従来の『秋山記』と『去年の枝折』に関する研究では、主として紀行文の内容が取り上げられ、たとえば、『秋山記』本文中の源氏物語論や『去年の枝折』の芭蕉批判の文章を通じて作者秋成の意図が論じられることが多かった<sup>4)</sup>。そのため、紀行文に収まっている和歌作品と俳諧作品に対しての簡単な言及はあったものの、具体的な考察は充分に行われていないと思われる。

本稿では『秋山記』所収の秋成の和歌二十三首と『去年の枝折』所収の秋成の発句二十三句及び付句三句を取り上げ、同一の旅に基づいて詠まれた和歌と俳諧はそれぞれどのような詠まれ方を見せているのかを比較しつつ検討していくことにする。それは、歌人であり、俳人であった秋成の中に和歌と俳諧はいかに意識されていたのか、そして和歌と俳諧との関わりについても知ることができると思うからである。方法としては、和歌と俳諧がどのような古典の伝統表現を踏まえ、どのような手法を用い、如何なる趣向を見せているかに注目していきたい。

さらに、秋成が和歌と俳諧のそれぞれを意識し表現する上でどのような差別・区別があったのかについて、『也哉鈔』や『藤篋冊子』などに見える秋成の言説を通じて探ってみたい。

## 2 和歌と俳諧—『秋山記』『去年の枝折』

和歌紀行『秋山記』には、秋成の和歌作品が二十三首、妻たま女九首、秋成とたま女の連歌が一首、女の友から一首、その他、漢詩一首などが入っている。これに対して俳諧紀行『去年の枝折』には、秋成の発句作品が二十三句、義竹二

3) 『秋山記』は『上田秋成全集』（第十巻 中央公論社、1991年）に、『去年の枝折』は『上田秋成全集』（第一巻 国書刊行会、1987年）に各々よる。

4) 高田衛(1968)「俳人無腸論」『上田秋成研究序説』寧楽書房、高田(1970)「秋成の芭蕉観」『中村俊定先生古希記念・近世文学論叢』桜楓社、森山重雄(1989)「『去年の枝折』とその芭蕉批判」『秋成言葉の辺境と異界』三一書房、勝倉寿一(1990)「秋成の紀行文—『去年の枝折』を中心に」『福島大学教育学部論集』47号、加藤裕一(1993)「秋成、城崎への足跡—『秋山記』と『去年の枝折』—」『歌子』、加藤(1994)「上田秋成の紀行文（その一）—『秋山記』・『去年の枝折』—」『実践女子短大評論』など。

句、正名二句、秋成付句三句が入っている。

次に、二作の行程中に各場所において詠まれた秋成の和歌と俳諧の一覧表を挙げる。便宜上、詠まれた地名に通し番号を付し、和歌と発句及び付句にはそれぞれローマ字の大文字と小文字をつけた。

地名	『秋山記』	『去年の枝折』
1 尼崎	A情ある人のこゝろをつくし 綿身にそへゆかばさむ けくもあらじ	
2 武庫川		a鞍かりて蹴上つめたし 朝ごころ
3 芦屋川	A蘆の屋の蟹のたく 火のそれかとて 道ゆき 人 過 てに見む	
4 菟原住吉		a雁啼て菊をかき根のやどりかな b 祭餅それか夜寒の 粥ましら
5 須磨		a 何も／＼ 秋詠め也須磨の里
6 明石	A暮るゝともいとはんものか 灯火の 明彦うらにむか ふ旅寝は Bうら風に 雲吹はれて 長月のながき 夜わたる 月のさ やけさ	a月は入ぬ彼朝霧のあかしがた
7 御着		a灰小屋をもるとも頼め秋時雨
8 西光寺野	A雨そゝぎ風吹立て秋の野の花のひもとく時は来 にけり	
9 館		a見あくれば月に声あり 嶺の松
10 栗賀	A朝さむにめさまし 草もとめては 山路 露金きて ゆくなり	
11 山の内		a山畑や蕎麦やが軒に花かほる
12 物の部		a秋山のしただみけりな 物のへん
13 和田山		a秋風に声また青し 笹のいほ
14 城崎	A山里は雨さへ 夜さへあらしさへよに 似ぬうさのひま なかりけり Bいを寐ねば 夢てふものも 夜がれてたよりほどふる 故さとの空 C染もはず 散もはじめぬ 山陰にはやくも 冬のけしき 立けり Dさよ中にかり 鳴わたるとこよ 出てつらにおくれし 雁	aわたくしの名にかくれたり 初時雨 b 震ふる湯ざめの 牀の 夜もすから c 月や霞 其夜の 更て 河千鳥 頭巾とらるゝ 橋の 西風 眠るか山の陰くらき岸 水も寝ぬかにさわぐ 枯蘆

	きわたる E 苔深き庭はもみぢの 観きて 紅ゝる冬の 山と F 木葉うく山下水の 厚氷心とけずも 日数へにけり G かくてのみ 住はつべくば 山風のはげしき 鶯うたて からまし H 冬枯の梢にかけて 久形の 桂の 花を 軒に 見かな	
15 高野の浜	A わたづみの たむけの ちぬさ 散みだり 藩 秋にし きをぞしく B 山高みあらしのうへに 身をのせて 空にさやけき月 をみるかな	
16 笹の浦	A 冬の夜は雲の絶まに 月さえてあられ 音るさゝの うら風	a 山を洗ふ雨に色なし秋の水 b 渡る雁声をから櫓の入江かな
17 山の井	A 雨ふかみけさは 岩井の 水えて 山下づく 音さ るなり	
18 帰路		a 桑の葉の是をや人の老といふも b 其濁り漉す物かさう旅頭巾
19 野中	A 時雨には袖こそしほれもみち 葉よ 風よりさきに 我見 はやさむ	
20 天の橋立	A いくそたび 松の 千年もおひかはりとこ 渡する 天 はし立	
21 夕日の浦	A おきつかぜさむき 日ねもすいさりして 夕日うらに かへる釣舟	
22 枯木の浦	A 与謝の海や 夕ほかけて 引綱のつなでのゆたに 物もひもなし	
23 真名井が原	A 神かぜにいぶさちらして 紅葉し 山より 冬はふかく なるらん	a 新なめを神のふらせる 木かげかな
24 伊丹(昔)		a 米つきも北へかへるや 天つかり
25 味間		a 霜曇り思ふかたから 旭さす
26 古市		a いざといはん 是の 姉輪の 雪の松
27 生瀬		a 霜わけん道かささぎの 橋ならば
28 尼崎		a 暁や市の中にもかね 氷る

上の表から分かるように、二つの紀行は同一の旅行に基づいて書かれているものの、秋成の和歌作品・俳諧作品がともに詠まれているのは、明石・城崎・笹の浦・

真名井が原の四ヶ所に過ぎない。和歌のみが詠まれているのが芦屋川・西光寺野・粟賀・高野の浜・山の井・野中・天の橋立・夕日の浦・枯木の浦の九ヶ所であり、俳諧作品のみが作られているのが武庫川・菟原住吉・須磨・御着・館・山の内・物の部・和田山・味間・古市・生瀬の十一ヶ所である。このように同一の地で詠まれた和歌・俳諧が少ないのは、『去年の枝折』の文末に「秋山の記の遺漏を翌年の冬難波にてかける也」とあることから考えて、『去年の枝折』ではなるべく『秋山記』で書き漏らした地を取り上げようとしたことによるのであろう。

まずは、和歌作品と俳諧作品がともに詠まれている明石・城崎・笹の浦・真名井が原の四ヶ所を具体的に見ていくことにする。

行程二日目、明石に泊まりを決めた秋成は、十三夜の感に堪えず、夜通し月見をし、その時の明石潟の風物を詠んでいる。『秋山記』の明石の場面では、6 A・6 Bの二首の歌が詠まれる。まず、一首目を見る。

6 A 暮るゝともいとはんものか灯火の明石のうらにむかふ旅寐は

この本歌として、次の歌は最も知られている。

灯火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず（『万葉集』二五四・人麿）

「灯火の」は「明石」にかかる枕詞である。その歌意は、明石海峡こさしかかる日には大和とも漕ぎ別れることであろうか、家の辺りも見られないよ、である。これに対して、『秋山記』の歌は「明石」に「明るい」の意をかけて「暮るゝともいとはんものか」と詠み、さらに明るい雰囲気を出している。次いで、

6 B うら風に雲吹はれて長月のながき夜わたる月のさやけさ

と詠んでいる。これは、海岸の強い風に雲が吹き払われ、長月の長い一夜の空を爽やかに月が渡っている、との歌意である。

『去年の枝折』の明石の場面では、

6 a 月は入ぬ彼朝霧のあかしがた

と詠んだ。「彼朝霧の」とは、

ほの／＼と明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ（『古今集』 羈旅・四〇九）  
この歌は、ある人の曰く、柿本人麿が歌なり

を指すのである。一句は、月の名所である明石の浦での十三夜の月 はもう沈んでしまい、今は、『古今集』の歌に詠まれたあの朝霧に包まれ、明けてゆくあかしがたで朝霧を味わっていることだ、との意である。

このように明石では、明石が播磨国の歌枕であることから、『秋山記』『去年の枝折』ともに、和歌に詠まれた明石の歌を踏まえて和歌と発句をそれぞれ詠んでいることが言える。

次に、城崎で詠まれた和歌作品と俳諧作品を見よう。秋成は、行程七日目に納屋・二見を通して、城崎湯に到着し、湯治のため約一ヶ月間城崎湯に滞在することになる。『秋山記』では、14Aから14Hまでの八首が詠まれた。

- 14A 山里は雨さへ夜さへあらしさへよに似ぬうさのひまなかりけり
- B いを寐ねば夢てふものも夜がれしてたよりほどふる 故さと の 空
- C 染もはず散もはじめぬ山陰にはやくも冬のけしき 立けり
- D さよ中にかり鳴わたるとこよ出てつらにおくれし雁なきわたる
- E 苔深き庭はもみちの散しきて紅くゝる冬の山ざと
- F 木葉うく山下水の厚氷心とけずも日数へにけり
- G かくてのみ住はつべくば山風のはげしき 音もうたてからまし
- H 冬枯の梢にかけて久形の桂の花を軒に見るかな

宿に滞在する中、降り続ける雨や激しく吹く風に気持ちを寄せて詠んでいる人事詠が多く見受けられる。たとえば、A・B・F・Gなどである。A「山里は」の歌は、山里で出会った雨や夜や嵐は、かつて経験したことのないもので、この憂さをはらすひまもないほどである、と詠んだ。B「いを寐ねば」の歌は、夜寝ると、夢というものまで途絶えて、故郷への便りもしばらく出さないでいることだなあ、と故郷に残した母を思って詠んでいる。F「木葉うく」の歌は、木の葉をうかべた山下水が氷りついたまま解けずにあるように、自身の心も和らぐ暇もなく、日数がたってしまった、と詠んだものである。G「かくてのみ」の歌は、こんなふうにして一生を住みはてるものなら、山風のはげしい音も面白くないだろうとの気持ちをよせて詠んだ。そして、自然の風景や景観をあるがまま詠んでいるものとして、C・E・Hを挙げよう。C「染もはず」の歌は、木の葉がすっかり紅

葉もせず、散りもはじめていないのに、早くも冬の気配を感じることを詠んでいる。E「苔深き」の歌は、深い苔に埋もれた庭に紅葉が散り敷いている風景を、「ちはやぶる神世もきかずたつた川から紅に水くゝるとは」（『古今集』二九四・業平）の歌を踏まえて詠んだ。H「冬枯の」の歌は、枕詞「久形の」と月の異名である「桂の花」を取り入れ、冬枯の梢にかかる月を軒端に眺める光景を詠んでいる。

一方、『去年の枝折』では、次の発句三句が詠まれた。

- 14a わたくしの名にかくれたり 初時雨
- b 霰ふる湯ざめの牀の夜もすがら
- c 月や霰 其夜の更て河千鳥

まず、a「わたくしの」の句中の季語である「初時雨」は、冬の到来を告げ、木の葉の移ろいをもたらしながら、季節を一気に押し進めてゆくもので、その冬はじめて降る時雨のことである。『去年の枝折』の中では、この句をもって冬の句が始まっており、冬になったというわびしい気持ちが裏にこめられていよう。一句は、そのような「初時雨」の情趣を味わうこともできず、降り続く「私雨」に紛れてしまった、ということ「わたくしの名にかくれたり」と詠んでいる。

b「霰ふる」の句については、次の歌が参考となるであろう。

よもすがらみぞれにさやぐ篠のはのみ山は雪のおもひやられて  
 (『雪玉集』七五〇九・実隆)

「霰」は時雨から雪に移り変わる時期の冬の景物として、『去年の枝折』でも、時雨が霰に変わり、霰が雪・氷に変わる、そのような時間の推移の中で詠まれている。一句には、和歌伝統の表現「霰」「夜もすがら」に俳言「湯ざめ」が取り合わされている。

次に、c「月や霰」の発句に対して、秋成は付句を三句詠み、それに対する自評を述べている。

- ア 頭巾とらるゝ橋の西風
- イ 眠るか山の陰くらき岸
- ウ 水も寝ぬのにさわぐ枯蘆

付句アに対しては、「されど難波男の頭巾吹とらるゝ西の風のさむきには劣りたらめ、貫之のおもひかね妹がりゆけばの歌の例もて、此句をおもはば、六月の身そぎはらひの日も、寒かるべしといふ」と記されている。貫之の歌は、

題知らず

思かね妹がり行けば 冬の夜の河風寒み千鳥鳴くなり (『拾遺集』二二四・貫之)

というもので、歌意は、恋しい思いに堪えかね、愛する人のもとを訪れて行くと、冬の夜の川風が寒いので、千鳥もわびしそうに鳴くのが聞こえるよ、である。この歌意と先に引用した文章とを考えると、秋成は貫之の歌の趣向をもって発句を詠んでいるわけである。即ち秋成は、月が出、霰が降っているその夜も更けてしまい、河辺には千鳥が寂しそうに鳴いているよ、との情景を出しているのである。そのような発句の趣を考え、付句アは、本歌から「冬の夜の河風寒み」の趣を出して、橋の上で西風に頭巾を吹き飛ばされる男の情景を詠んでいる。そこを秋成は自賛している。付句イ「眠るか山の陰くらき岸」に対しては、「月の光を思ひて山陰のくらしとや、是ぞ古人の忘たる用付成べし、岸も又河ぎしとつゞきてあしかるべきか、(中略)よく付たり共おぼえず承りぬ」と記されている。用付とは物の体(本体)を詠んだ前句に、その用(作用・属性など)を付けること<sup>5)</sup>であり、「舟の綱手縄とある句に、くり返し・引などと付くる事、悪心得ぬれば用付に成て一段あしく候」(『永文』)<sup>6)</sup>とある。ここでは、発句に「月や霰」を出しているのに対し、月の光を思い「山の陰くらき」と付けていることと、発句の「河千鳥」に対し、「岸」を出すと河岸となり、作意の転換・変化が弱いのでよくないことだと批判している。なお、付句ウ「水も寝ぬのにさわぐ枯蘆」に対しては、「川上に千鳥の声更わたる、夜水も寝ぬ計、枯蘆の風にさわぐさまいと社よくも云次がれたれ、されど難波男の頭巾吹とらるゝ西の風のさむきには劣りたらめ」といい、肯定しながらも最初の付句アよりは劣っていると自己批評している。

次は、笹の浦で詠まれた和歌作品と俳諧作品を見てみる。『秋山記』では、「ゆふ月のおもしろきに、さゝの浦まであゆむ。(中略)俄に雲おこりて、霰ふり、風もはげしう吹。」との文章のあとに次の歌が詠まれた。

16A 冬の夜は雲の絶まに月さえてあられ音あるさゝのうら風

5) 『俳文学大辞典』「用付」角川書店、1995年、937頁。

6) 『永文』『連歌論集』四 三弥井書店、1990年。

霰がさらさらと音をたて、風がはげしく吹きつけている風景を詠んだもので、地名「さゝのうら」と霰の降る音を掛けている。

一方『去年の枝折』では、笹の浦で昔からの料理屋を訪ねるが、その家の主も代替わりして、その主の子という男が出迎えてもてなす場面として、「盃さゝげ出てすゝむ、されば社笹の浦とはよぶなれ、雨の後に雲の名ごりある夕暮也」という文が書かれている。すなわち、笹に酒（ササ）をかけて滑稽化しているところで、16a「山を洗ふ雨に色なし秋の水」の一句を詠んでいる。次いでは、「暮て雁なきわたる」とあり、

16 b 渡る雁声をから櫓の入江かな

と詠んでいる。雁の鳴き声とから櫓との取り合わせは、『夫木抄』の歌「さ夜ふけてうらにからろの音すなり天のと渡る雁にや有るらん」（前中納言通房卿・四九二六）からも見ることができる。一句では、雁の鳴く声をから櫓に見立て、「声を囁らす」と「から櫓」をかけて詠んだ。

次は、真名井が原で詠まれている和歌と発句を見てみる。『秋山記』の真名井が原では、豊受大神と伊勢の外宮の関係が述べられている。

23A 神かぜにいぶきちらして紅葉せし山より冬はふかくなるらん

この歌は、『万葉集』の人麿の歌「. . . 渡会の斎の宮ゆ神風にい吹き惑はし天雲を日の目も見せず. . .」（二・一九九）を踏まえている。『万葉集』の伊勢の神宮から神風を吹かせるとの表現を借りて、『秋山記』の真名井が原で展開される文章に合わせて一首を詠んだ。

『去年の枝折』では、真名井が原にある豊御食の大神に参拝する場面として、神社の垣根の下で木の実を拾っている老いた神官のことが「いと神さびたり」と評されているが、その次、

何ぞととへば、つるばみ也とこたふ。さは御装束摺そめさせたまはん料に社といへば、いな白につきて餅につくり、朝夕の物にすと云。うまき物にやといへば、あらず米のともしきといふ。いとかなしげ也、げに保食の神もなしまさざりしかば、あちなき物にこそあらめ、

23a新なめを神のふらせる木かげかな  
 といはひ言して過ぬ。

と書かれている。ここでは、食物をつかさどる神としての豊受大神を祭っている豊受大神宮の老いたる神官が、米が少ないため瑞垣の下でつるばみを拾っていることに対して一句を詠んで皮肉っている。

以上のように、和歌・発句がともに詠まれている地での作品を比較してみると、まずは、明石をはじめ他の地において両方とも先行する和歌作品を踏まえているものが多いという共通性が見られた。城崎湯の滞在中に詠まれた作品には人事を詠んだものが目立っている反面、自然の風景を詠んだものも見られた。笹が浦では、和歌の場合、自然の風景を詠む中、霰の降る音を地名「笹の浦」に掛けて詠んでいた。発句の場合は、地名に因んで滑稽化した文章が置かれた後、俳言を含まない和歌的情趣の句が詠まれた。これは、雅・俗ともに内在していることで俳諧化が図られている『去年の枝折』の一つの特徴と言えるものであろう。真名井が原では、両方ともに文章の内容に因んだ作り方がなされていることが見られた。

次に、『秋山記』に収まる和歌作品の全体的傾向を見てみると、紀行文中の和歌であることから、当然、風景詠・景観詠が多いと考えられ、14C・14E・14Hなどのような景観句もある。まず、14C「染もはず散もはじめぬ山陰にはやくも冬のけしき立けり」の歌は、木々の葉がまだ紅葉に染まりきらず、散りはじめてもいないというのに、この山陰では早くも冬の気配が感じとられることだ、と詠んでいる。14E「苔深き庭はもみぢの散しきて紅くゝる冬の山ざと」の歌は、この冬の山里の庭の苔がすっかり紅葉で埋め尽くされている風景を紅葉にしほり染められていると見立てて詠んでいる。14H「冬枯の梢にかけて久形の桂の花を軒に見るかな」の歌は、冬枯の梢にかかる月を軒端に眺める光景を詠んでいる。

しかし、その一方で、その土地に因んだ「ことば」を中心にした詠み方がなされている点が注目される。3A・6A・6B・10Aなどである。一首ずつ見ていこう。

3A歌の前後の文章を『秋山記』の本文から引用する。

芦屋川の松陰にしばしおりて、土くぼかなるに、小石をつみて、木葉松笠打くべつゝ、  
茶を煎て遊ぶ、(中略)、

蘆の屋の蟹のたく火のそれかとて道ゆき人も過がてに見む  
日高けれど、住よしの里にやどりぬ、

(『秋山記』)

秋成は行程一日目に芦屋川(現兵庫県芦屋市)を通り、その際、土地の名「芦屋」を歌い込んでいる。「葦の屋」は摂津国の歌枕であって、次の二首は最も知られて

いる。

蘆の屋の灘の塩焼きいとまなみつげの小櫛もさゝず来にけり  
 (『新古今集』一五九〇・在原業平朝臣)

晴るゝ夜の星か河辺の蜚かもわが住むかたの海人のたく火か  
 (『新古今集』一五九一・在原業平朝臣)

二首ともに『伊勢物語』八七段に載っており、特に一五九〇の歌は、前書に「昔、男、津の国、菟原の郡、蘆屋の里にしるよしして、いきてすみけり。昔の歌に」とある。ここで昔の歌として引かれたのは、「志賀の海人はめ刈り塩焼き暇なみくしげの小櫛取りも見なくに」（『万葉集』三・二七八・石川少郎）である。秋成は菟原の芦屋川で松の陰にしばし休息し、木の葉や松笠をくべながら茶を煎じているが、その煙を見て、『伊勢物語』等の歌を踏まえて歌を詠んでいる。歌意としては、「(この煙を見て)あの蘆屋の、蘆で葺いたそまつな小屋に住む海女が焚く火かと思ひ、道を行く人も見過ごしかねるよに見ることだろう。」と取れよう。ここでは、古典のみやびの世界で詠まれた歌枕をもって伝統的な和歌の世界を踏まえながらも、実際には「茶の煙」を取り上げているところに卑俗性・滑稽性が認められる。

次に、6Aと6Bについては明石の地で詠まれた和歌として前にも述べたので、ここでは簡単に触れることにする。6A「暮るゝとも」の歌では、明石の浦の実景が詠まれるよりは「明石」に因んだ作り方がなされている。本歌として踏まえられた『万葉集』の人麿の歌「灯火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず」（三・二五四）において、明石は交通の要衝として詠まれている。これに対して、秋成は「明石」に「明るい」の意をかけて「暮るゝともいとはんものか」と詠み、日が暮れても構わないよ、どんどん進んで行きましよう、との明るい雰囲気を出しているところに滑稽性が見える。

次いで、6B「うら風に」の歌は、海岸の強い風に雲が吹き払われ、長月の長い一夜の空を爽やかに月が渡っている、との歌意として、「長月」ということばから「ながき夜」を取り入れ機知的に詠んだものである。

また、10A「朝さむにめさまし草をもとめては山路の露金おきてゆくなり」の歌では、「露金」ということばに注意したい。茶の異名である「めさまし草」を取り入れ、草の縁語で露を出し、「露金」に路銀の意をかけた。朝寒の中で茶を買い求めるために山路を辿る旅費の一部を置いてゆくことだ、との歌意である。ここでさらに注意したいの

は、10A「朝さむに」のように、雅語のみを用いて作るべき和歌において、「露金」（ロギン）という俳言が用いられていることである。和歌においては、漢語に拠らず、大和言葉（雅語）で詠むことが大原則である<sup>7)</sup>ことを考えると、これは異例のものであり、破格の詠み方と言えるであろう。

続いて『去年の枝折』の発句作品の全体的傾向を見てみると、和歌で見たのと同様にその土地に因んだ「ことば」を中心にした詠み方がなされており、たとえば、4a「雁啼て菊をかき根のやどりかな」・5a「何も／＼秋詠め也須磨の里」・6a「月に入ぬ彼朝霧のあかしがた」・27a「霜わけん道かささぎの橋ならば」などである。まず、4a句を見てみる。

ここは兎はらの郡ながら、郷の名の同じきにぞ、

4a 雁啼て菊をかき根のやどりかな

秋成は行程一日目を迎え、住吉に宿ることにする。そこは兎原住吉で、現兵庫県神戸市東灘区に当たるが、当時は村中央に兎原住吉神社があったという<sup>8)</sup>。秋成はその住吉という地名から大坂市住吉区住吉神社のあたりを思い出し、「住吉の浜」で詠まれた「雁なきて菊の花さく秋はあれど春の海辺に住吉の浜」（『伊勢物語』六十八段）という歌を踏まえて句作りをしている。『伊勢物語』の歌は、雁が鳴いて、菊の花が咲きにおう秋の風景もよいが、それにもまして春の海辺に住んだらよいなあ、と思える住吉の浜であることよ、と詠んだものである。それに対して、秋成は秋季に兎原住吉を訪ねてきて、大坂の住吉ではないが地名が似ていることから右の『伊勢物語』の歌を踏まえて一句を詠んでいる。即ち、『伊勢物語』の語り手は春の住吉の浜を賞賛しているのに対し、秋成は、雁が鳴き、菊が咲くこの秋に兎原住吉を訪ねてきて、今日は菊の花が咲いている垣根の宿場に宿泊することよ、と詠んだのである。地名「兎原住吉」から「大坂の住吉」を思い起こし、また『伊勢物語』の古歌を踏まえて「秋のやどり」を詠んだところに、その俳諧性が認められる。

次に、5a「何も／＼秋詠め也須磨の里」の場合、須磨の実景が詠まれるよりは、「須磨」という歌枕を中心にした句作りがなされている。俳言が詠まれていない句であるが、「何も／＼」ということばを取り入れており、「詠め」は「眺め」とも掛けられるところに俳諧性が見られる。

6a「月に入ぬ彼朝霧のあかしがた」の句については前にも述べたが、明石灘に

7) 「大和言葉」『日本古典文学大辞典』第六巻 岩波書店、1985年、83頁。

8) 『兵庫県 角川日本地名大辞典二八』角川書店、1988年。

因んだ句作りがなされている。一句は、『古今集』の「ほの／＼と明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ」（羈旅・四〇九）という歌を踏まえ、月の名所である明石の浦での十三夜の月はもう沈んでしまい、今は、『古今集』の歌に詠まれたあの朝霧に包まれ、明けてゆくあかしがたで朝霧を味わっていることだ、との意である。

最後に、27a句について、『去年の枝折』の本文から次の文を引用する。

けふは難波にかへるべき日也、人々こゝちいさめるにぞ、霜の深きも山風の寒きも物ならで、（中略）木の本と云郷よりなま瀬にくるあひだ、山も川もおもしろき所也、高欄だつ物かけわたして、いとかめしく造りたる橋を、谷の深きにかよはせたり、九鬼殿のいききの御為なりと云、

27a 霜わけん道かささぎの橋ならば

この句については次の歌が参考となる。

かさゝぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞふけにける

（『新古今集』冬・六二〇・中納言家持）

鶺鴒の渡せる橋の霜の上を夜半に踏み分けことさらにこそ

（『大和物語』一二五段）

かささぎのわたすやいつこ夕霜の雲井に白き峯のかけはし

（『新勅撰集』冬・三七五・正三位家隆）

本文に「九鬼殿のいききの御為なり」とあるのは、安土桃山時代の武将九鬼嘉隆を指す。九鬼氏は初め織田信長に従い、のち文禄の役に水軍を率いて奮戦、関ヶ原の戦いに石田三成にくみし、敗れて紀伊に走り自殺した人物である。「いとかめしく造りたる橋」とは、彼が水軍として大いに活躍した時、秀吉の命令により造られたものである<sup>9)</sup>。帰路につく朝は「霜の深きも山風の寒きも物ならで」心が勇んでいた。秋成は、生瀬に来て「いとかめしく造りたる橋」を見ては、宮中の階段を天の川にかかる「かささぎの橋」に見立てて詠んだ『新古今集』などの歌を踏まえて一句を詠んでいる。「橋」には「置霜」と「鶺鴒」が付合となっている<sup>10)</sup>。秋成は「橋」を中心にして付合という俳諧的手法を用い、右のような歌のイメージを詠み込んでいるのである。一句は、道の上に降りた霜を踏み分けて歩こう、それが七夕に鶺鴒が翅を並べて造った橋のようなものであるならば、との意である。

9) 森山重雄（1989）『秋成言葉の辺境と異界』三一書房。

10) 『俳諧類船集索引付合語篇』別巻1（近世文芸叢刊）般庵野間光辰先生華甲記念会、1973、358頁。

以上のように『去年の枝折』の俳諧作品には「ことば」のもじり・掛詞などの技法を用いた滑稽性の強い作例が見られた。しかしその一方では、俳言の全く含まれない句が作られていることが注目される。前に見てきたように、6a「月は入ぬ彼朝霧のあかしがた」・14 c「月や霞其夜の更て河千鳥」・16a「山を洗ふ雨に色なし秋の水」などである。それぞれ雅語のみの作り方がなされており、和歌に近いと言えるであろう。

和歌・俳諧のそれぞれの全体的傾向を見てみた結果、先行作品を意識した上で、地名や季語・事物の名などの「ことば」を中心とした詠まれ方がなされていることが確認できた。また、和歌作品の中には俳言が用いられているものも含め、滑稽性のある作品がいくつか見られた。反対に、発句作品の中には俳言が全く見られず雅語のみで作られているものがいくつか見られた。すなわち、和歌に俳諧的要素のある作品が見られ、俳諧には和歌的要素のある作品が見られる、ということが判明したと言える。

では、なぜこのような作り方がなされているのだろうか。次節において、和歌・俳諧の詠出にあたっての秋成の表現意識をその言説から探ってみることで、その答えを導き出してみたい。

### 3 秋成の表現意識

本節では、秋成が和歌と発句を表現する上で、その表現意識にどのような差異があったのか、あるいはなかったのかについて、秋成の言説を通じて検討していくことにする。論じるに当たってその手がかりを与えてくれると思われるのは、次のような言説である。

まず、一つ目に秋成の俳諧の切字論書『也哉鈔』を取り上げる。これは安永二年（一七七二）に稿がなり、天明七年（一七八七）に刊行されたものとして、一方では『秋山記』『去年の枝折』の二作とほぼ同じ時期のものであるといえる。次に『也哉鈔』の一部分を引用する。

夜あるきを母寐ざりける水鶏哉 其角

此句は[かな]の義はたがはねど。自他のことわりたがへれば。ついでに云也。是夜あるきする子を。母のなげきて寐ざりけるといひ立て。水鶏のたゞくをば。野らものがかへりし

かと思ふとの意なるべし。是水鶏哉とばかりにては。さる長々しき心はことわりたらず。くひなは思ひ子の帰りにたとへ。寐ざるは母の慈愛とわかれて。自他の差別なき也。(中略) わずか十七字の間に。ふさはぬ長きこゝろばへを打出るがあやまれる也。歌にもあれ。発句にもあれ。それがいひおほすべきほど／＼の事を打出んに。言語をなさぬ事はあらじものを。たとはゞ千里を一日にゆかん竜馬と云も。数万斤を負せなば一步もすゝむべからず。言語の神妙。てにはの活用も。凡其文字の数に負すべきかぎり有べし。十七字に巧みえぬは。三十一言の歌有。狂歌有。猶いひたらずば長歌あり。文辞あり。其ほど／＼をはかりて打出べきもの也けり。

ここは、『也哉鈔』の中で其角の句を取り上げて批判した部分として、その文学表現に関する秋成の持論が展開されている<sup>11)</sup>。秋成は其角の「夜あるきを母寐ざりける水鶏哉」という句を、「夜あるきする子を。母のなげきて寐ざりけるといひ立て。水鶏のたゞくをば。野らものがかへりしかと思ふとの意なるべし」と解釈し、「是水鶏哉とばかりにては、さる長々しき心はことわりたらず」と言った。つまり、主語が子と母とに分かれる内容を十七文字に表現しようとするところに無理があると指摘し、「わずか十七字の間に、ふさはぬ長きこゝろばへを打出るがあやまれる也」と批判している。

また、「十七字に巧みえぬは。三十一言の歌有。狂歌有。猶いひたらずば長歌あり。文辞あり。其ほど／＼をはかりて打出べきもの也けり」と述べ、表現しようとする事柄に応じて、発句、和歌、狂歌、長歌、文章などにその形式を選ぶべきだと主張している。すなわち、秋成は発句という形式のみを固執する態度を批判していることであり、言い換えれば、韻文と散文の相違にもこだわらないということである。もう一つ、『冠辞続紹』（寛政八年稿）にも同様のことが見られる。<sup>12)</sup>

いにしへは歌と文のけちめなく、言に出てしらはとゞのへしを、やうつりての世に、こは歌なり、是は文なりとしもいひ定めしは、言に挙ぐのみと、うたひはやせるけちめになん有を、立かへりてただ読て見れば、何のわきなき言の幸はひなりけり（『冠辞続紹』）

次は、晩年作『藤篋冊子』の巻四の序に当たる部分として、文末に「小草川のべにやどりする旅人云」とあり、寛政十年（一七九八）秋成六十五歳、羽倉信美邸内鴨塘寓舎に仮寓した時に記されたものである。

11) 金田房子(1990)「『也哉鈔』論述の性格」『国語国文』59巻9号、61頁。

12) これについて、夙に中村幸彦氏は、「(秋成は)本質としてのこの歌文一如論は常にいたっていたようである」と述べられている。「上田秋成雑記」『中村幸彦著述集』第六巻 中央公論社 1982、246頁。

歌と云もこと也、ふみといふも言也、事しあれば言に出る、是をこと挙げといひしがいにしへ也、其事のよるこびうれたきにも、うたふにあかず、こちたきには言をつらねてつばらかな覽とす、是を文といふ、(中略)冬のもみぢの風の散かひに、彼も是もおのづからなるものとしられてこそ、言はつらぬべけれ、ながきころを短く、事すくなきをば長ばへたらむ、ほと／＼かたきわざにしも有か、千さと行竜の馬も、あまりにおひ荷はせた覽には、あゆむにたふまじくや、から猫の毬ころばせてたはるゝ如に、歌もふみもあそばめ、歌といふもこと也、文といふも言也、いづれをか安きにおかむ、いづれかおろそげならむ、

この文から秋成の歌と文についての見解が述べられていることが見て取れよう。歌も文章も言葉による表出であって、心の中に言いたい事柄があり、それが言葉により表現される、また、言いたいことが多いか少ないかにより、表現形式を選ぶものであるというのである。それはたとえば、猫が毬を転がして戯れる様に「歌もふみもあそばめ」と記している。つまり、歌も文章も心の表現を楽しむのがよいと言っているのである。

この他にも、『檣の杣』（寛政十二年稿）『遠駝延五登』（享和三年刊）などのような資料から、秋成の心についての同様のことが見られる。

いにしへの歌は、心におもふ事のあまりて、言に挙てうたふものなれば、歌は心の中よりいづる者也。文とて事長くつらぬるは、たゞへ言とそのかみは云て、外より来たるものよといひし人あり

（『檣の杣』）

凡文も歌も世のありさまにつきてぞころをうべき

（『遠駝延五登』）

上の言説からも分かるように、秋成は文学の表現形式よりは、その言葉による心の表現を重視したと言えるだろう。すなわち、その心の表現を楽しむ姿勢や態度などが、和歌・和文や俳諧などのジャンルの違いを越えて文学の活動を行う意識の中にあつたというのである。秋成の和歌作品と俳諧作品において、和歌に俳諧的要素があり、俳諧に和歌的要素があることの背景には、秋成のこうした表現意識があつたものと考えられる。

## 4 おわりに

以上、本稿では、秋成の和歌と俳諧との関わりについて、『秋山記』の和歌と『去年の枝折』の発句とを取り上げて比較及び検討を行った。その結果、『去年の

『枝折』の発句には、「ことば」を中心にして機知的に詠んだ句が多く見られるが、その一方で全く俳言を含まない作品もあることが明らかとなった。一方、『秋山記』の和歌の方には、「ことば」を中心にした詠み方で滑稽性のある作品や俳言の用いられている和歌もあることが明らかとなった。すなわち、近世和文の観点から研究がなされている『秋山記』にも俳諧性が認められるということであり、いずれも従来の在り方と評価を見直すことを迫る結果となった。

さらに、和歌と俳諧について、秋成はそれらをいかに意識し表現したかを、『也哉抄』と『藤篋冊子』などに見える秋成の言説を通じて探ってみた。その結果、秋成は和歌と俳諧に対する表現意識においてその差異がないこと、つまり、和歌と俳諧に対する上下の区別及び差別がないということが認められた。秋成は文学の表現形式よりは、むしろ、その言葉による心の表現を重視したことと、その心の表現を楽しむ姿勢と態度とが、ジャンルを越えた創作活動の根幹であったことを確認することができた。

## 【参考文献】

- 『歌ことば歌枕大辞典』(1999)、角川書店
- 『角川日本地名大辞典二八 兵庫県』(1988)、角川書店
- 『図説俳句大歳時記』新年～春(1981)、角川書店
- 『日本古典文学大辞典』(1985)、第六巻 岩波書店
- 『俳諧類船集』(1973)、俳諧類船集索引 付合語篇
- 『俳文学大辞典』(1995)、角川書店
- 『和歌大辞典』(1986)、明治書院

- 石川真弘(2001、5)「上田秋成発句集」『ビブリア』115号、天理図書館報、16～33頁
- 額原退蔵(1980)「俳人としての秋成」『額原退蔵著作集』第5巻、中央公論社、334頁  
(初出は、「無腸句集」『上方』45号、1934年)
- 金田房子(1990、9)「『也哉抄』論述の性格」『国語国文』、61頁
- 高田衛(1964)『上田秋成年譜考説』明善堂書店、347頁
- 高田衛(1968)「俳人無腸論」『上田秋成研究序説』寧楽書房、458～459頁
- 中村幸彦(1982)『中村幸彦著述集』第6巻、中央公論社、218頁
- 中村幸彦篇(1991)『上田秋成全集』第6巻・第10巻 中央公論社
- 森山重雄(1989)『秋成言葉の辺境と異界』三一書房

## 要 旨

従来、秋成の『秋山記』と『去年の枝折』に関する研究では、主として紀行文の内容が取り上げられ、たとえば、『秋山記』本文中の源氏物語論や『去年の枝折』の芭蕉批判の文章を通じて作者秋成の意図が論じられることが多かった。そのため、紀行文に収まっている和歌作品と俳諧作品に対しての簡単な言及はあったものの、具体的な考察は充分に行われていない。

本稿では『秋山記』所収の秋成の和歌と『去年の枝折』所収の秋成発句とを取り上げ、同一の旅行に基づいて詠まれた和歌と俳諧はそれぞれどのような詠まれ方を見せているのかについて比較及び検討を行った。その結果、『去年の枝折』の発句には、「ことば」を中心にして機知的に詠んだ句が多く見られるが、その一方で全く俳言を含まない作品もあることが明らかとなった。一方、『秋山記』の和歌の方には、「ことば」を中心にした詠み方で滑稽性のある作品や俳言の用いられている和歌もあることが明らかとなった。すなわち、近世和文の観点から研究がなされている『秋山記』にも俳諧性が認められるということであり、いずれも従来の在り方と評価を見直すものであると言えよう。

さらに、和歌と俳諧について、秋成はそれらをいかに意識し表現したかを、『也哉鈔』と『藤篋冊子』に見える秋成の言説を通じて探ってみた。その結果、秋成は和歌と俳諧に対する表現意識においてその差異がないこと、つまり、和歌と俳諧に対する上下の区別及び差別がないということが認められた。秋成は文学の表現形式よりは、むしろ、その言葉による心の表現を重視したことと、その心の表現を楽しむ姿勢と態度とが、ジャンルを越えた創作活動の根幹であったことが指摘できた。

キーワード：和歌、発句、俳言、滑稽性、俳諧性、言説、表現意識

투 고 : 2006. 5. 31  
1차 심사 : 2006. 6. 10  
2차 심사 : 2006. 7. 1

住 所 : (153-766) 서울시 금천구 시흥2동 벽산아파트5단지 509동201호  
電 話 : 010-3035-5497  
e-mail : andantina@hanmail.net